再生可能エネルギー先がけの地へ

伊藤　早織

「ドドン」

六年前、東日本大震災が東北地方をおそった。ほんの一しゅんで町があれ地になり、地震とそれによる津波のため、福島第一原子力発電所がはく発した。さらに、いつ元の暮らしにもどるのかの見通しがたたず、福島県から住民がつぎつぎとにげていった。

私は、夏休みの自由研究で「環境エネルギー」の現状と未来」について調べることにした。研究する中で土湯のバイナリー発電に興味をもち見学に行った。そして、「再生可能エネルギー先がけの地」を目指し始めた理由を聞き、おどろいた。その理由の一つは、地球温暖化防止のため。そしてもう一つは、雇用そう出のためだ。そして今は、バイナリー発電の従業員だけで五人以上の雇用を生んだという。

震災から六年たった今でも働く場所がない

人がいることにしょう撃をうけた。私は震災前とあまり変わらない生活をしているため、仕事の数が足りないなんて思ってもみなかった。

また、温泉のはい熱でオニテナガエビを始めとした、いくつかの種類の生き物たちが育てられている。いつかこのオニテナガエビが土湯の名産品になればとても良いなと思う。今まで震災の影響でさみしくなっていた土湯温泉街。雇用を生むことによって、住民が増

え、また震災以前より町が明るくなるのではないかと考え、皆で協力して、素晴らしい事業を始めたのである。

次に、いわき市のアグリパークを見学した。ここでは、農業と太陽光発電を一体化させた「ソーラーシェアリング」が行われていた。太陽光発電の最大の欠点は、広大な土地を必要とすることだ。それをふまえ、農業と太陽光発電を一体化することによって、農地を有効に使うことはとてもすばらしいなと思った。

福島県では、二〇四〇年までに県内で使うエネルギーの百％相当量を、再生可能エネルギーで生み出すことを目標としており、洋上風力発電やバイオマス発電など他にも多くの発電を研究している。

私の通っている郷ヶ丘小学校は今年「先がけの地における再生可能エネルギー教育推進校」に選ばれた。また、昨年五年生の時から総合の学習で再生可能エネルギーの長所や短所を調べる学習を行ってきた。それで再生可

能エネルギーに興味をもち今年の夏、自由研究のテーマに選んだ。それによって、福島県が震災前よりもすばらしい県になろうとしているのが分かってうれしかった。

以前、放射能で汚せんされたことで知られていた福島県が、再生可能エネルギー先がけの地として有名になれば良いなと思う。また、私たちにできることがあったら、進んでこの活動に協力したいと心から思った。

ちりも積もれば山となる

少しずつ行ってきた小さなことが、積み重なることによって、やがて山のように大きなものになる。私は、福島のため、地球温暖化防止のためにもまずは、節水や節電などの自分の足元からできることに挑戦していきたいなと思う。なぜならこの活動を続けていけば、きっとすばらしい世界になると思うからだ。

それと共に、将来を担う私達に環境問題や福島県の再生可能エネルギー先がけの地を目指す取り組みについて教えて下さった、たくさんの先生方に感謝の気持ちをもち、これからも学んだことを次の世代へと引きついでいきたい。

現在、太陽光発電パネル設置量、全国二位の福島。太陽光以外の発電でも、全国上位に並ぶようなすばらしい県として有名になると良いなと思った。そのためには、私たちの力が必要になると思う。

だから、一人一人がふだんから環境問題に視点を向け今の住みやすい暮らしが続けられ

るように気を配っていきたい。

将来、すばらしい発展をとげた福島県が天災などで苦労した、他の被災地の希望になる時が来ることを願う。それまでは、私達も小さなことから、環境問題について考え、実行できるようにしていく心構えをもつことが必要だと思う。